

新疆ウイグル自治区における観光産業発展の動態

日時 2015年6月26日（金）13：00～14：30

場所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講師 山田 勅之（人権問題研究室委嘱研究員）

「アッサラーム・アライコム」、「アライコム・サラーム」。このイスラム圏共通の挨拶は、シルクロードの東の民・ウイグル族の間でも一般に通用している。

近年中国の観光の発展は著しく、道路や鉄道、空港の建設といったインフラ整備はもとより、人材開発も含め、観光に関する諸々は国家の政策に拠るところが大きい。それは本講座が取り扱う新疆ウイグル自治区においても同様である。

新疆ウイグル自治区は中国の西北部に位置している。自治区全体の人口は、2010年の人口センサスによると、約2160万人で、そのうちウイグル族がおよそ1000万人を占め、漢族の人口（約883万人）を超える。新疆駐屯の人民解放軍などの数は含まれていないものの、このように少数民族が漢族の人口を上回るのは新疆とチベット自治区のみである。また、ウイグル族は中央アジア諸国の多くの主要民族と同様、イスラム教を信仰するトルコ系民族で、彼らの持つ文化は観光資源として以前から政府より有望視され、観光産業の発展が図られてきた。

その一方で、新疆ではウイグル族と漢族の間で民族衝突が頻発している。2009年のウルムチ騒乱をはじめ、2014年1月から2015年4月現在において、朝日新聞紙上で報道されている事件だけでも、19件を数える。これに対し中国政府はウイグル族のアイデンティティの根幹を成すイスラム教への締め付けを強化—ウイグル族幹部の礼拝禁止、女性のベール着用禁止、ラマダン期間中のレストラン営業の強要など—、する一方、ウイグル族と漢族との格差を是正する経済優遇政策を実施しているという。はたして、その実情は如何なるものであろうか。

本講座では、まず民族文化を基調とする観光スポットの制度化の実情を俯瞰してみたい。ついで、ウルムチの国際大バザール、カシュガル職人街、ホータンの玉石屋の3ヶ所における現地調査の結果を報告する。

そこから、イスラム教に基づく要素が多分に含まれるウイグル文化の観光商品化と「テロ」抑止策としてのイスラム教締め付けという相矛盾する政策のせめぎ合いが、観光の現場においてどのように発露されているのか、検討することができると思われる。

観光には社会の安定と開放が必須である。新疆の政治経済に関する研究は、一次資料入手の困難性や強い報道管制といった問題を抱えているが、このような観光の動態分析は、ウイグル問題に切り込める、一つの可能性を示していると考えられる。

* * *

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。

手話通訳が必要な場合は、6月11日(木)までに人権問題研究室へご連絡ください。

第83回 10月23日（金）13：00～14：30「基幹相談支援センターの役割 —障害のある人の地域生活を支える—」

第84回 11月27日（金）13：00～14：30「国境を越える女性の移動から見るグローバル化」（仮題）

会場は、尚文館 1階 マルチメディアAV大教室



主催 関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 阪急千里線「関大前」駅下車

Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>